

「県教連」会報

平成16年1月21日
岩手県立総合教育センター
「県教連」事務局 NO.2

「目標に準拠した評価に基づく学習指導の工夫」

元栃木県鹿沼市立東中学校長 鈴木 節也 氏



平成15年度岩手県教育研究所連盟所員研修会の講義は、鈴木先生が現職校長時代、全国に先駆けて、教育評価を「目標に準拠した評価」に転換したときの実践を基にした講義でした。その講義内容の要旨を紹介致します。

1 私の学校改革

- (1) 今から5年前に目標に準拠した評価に転換した理由
 - ・子どもの学習の実態から
 - ・教師の学習に対するマンネリ化を除去するため
 - ・保護者や地域の人々の教育に対する考えを見直してもらうため
- (2) 目標に準拠した評価へ転換するための方策
 - ・評価観を変える(目標に準拠した評価に転換)
 - ・定期テストを廃止して小テストに変える
 - ・4観点のうち観点1(関心・意欲・態度)を全校体制で重視する(自己評価重視)
- (3) 子どもの変容の姿
 - ・主体性が身に付く
 - ・生活リズムや進路観が変わる
 - ・学校生活にゆとりができたことにより不登校が激減する
- (4) 進める上での配慮事項
 - ・教師の共通理解(意識の共通化)を図る
 - ・子どもや保護者への周知徹底を行う
 - ・地域の各種団体を啓発する
 - ・PTA広報部やマスコミの力を借りる

私が勤務していた学校は、不登校等による生徒指導上の問題を抱えていた。また、定期テストの結果によってのみ成績を決めていたことにより、日常の授業が軽視され成立しにくい状況があった。そこで、定期テスト等を廃止し、授業過程における評価を大切にすべく目標に準拠した評価に転換した。子ども達の学習の様子は、初めこそ従来とあまり変化がなかったが、2学期あたりから主体的に学習に取り組むようになってきた。これは、毎時間自己評価を続けるうちに目的意識を明確にもてるようになってきたことに起因している。また、不登校も激減した。当初は、地域や保護者から大変な批判があったが、子ども達の変容することに

より、批判も少なくなってきた。不退転の決意で取り組んだことが好ましい状況に変えたと思う。

2 目標に準拠した評価をどのように考えたらいいのか

- (1) 評価の二つの解釈
 - ・一般的な解釈は、見定め 認め 判定する
 - ・教育評価としての解釈は、最終的には、「自己評価能力」を身に付けることである
- (2) 子ども側に立った目標準拠評価
子どもに生きて働く評価、つまり指導と評価の一体化を図ることが大切である
目標に準拠した評価は、総括的に評価することに主眼をおいているのではない。学習途中における評価を重視し、それに基づいて指導に生かすことである。
つまり、授業中における生徒の活動を3段階(A B C)に分けた基準で漠然と評価することだけではなく、どのような生徒に成長すればよいか、その姿をあらかじめ想定しておき、目指すその姿を実現させるための指導を行うことである。

具体例(中学校理科)

〔重点評価規準〕

観点1(関心・意欲・態度)

「場所と植生の関係について、問題を見つけ学習しようとしている」

教師が期待する生徒像

場所によって生育している植物が違っていることに興味をもち、意欲的に探究しようとしている。

支援した結果の生徒像

学校周辺の植物に関心をもち、グループのメンバーと協力しながら意欲的に観察している。

3 指導と評価の一体化を図った学習指導の工夫について

- (1) 評価活動とは何かの共通理解

評価活動とは、目標に照らして子どもからの情報を瞬時に「収集」し、それを「解釈」して言葉を添えて返し、大切かどうかを判断し「調整」することである

(2) 指導計画と評価計画との一体化

授業には、指導計画、指導目標に基づく評価計画、評価の目標がなければならない

(3) 基礎・基本の定着

評価の目標（いわゆる指導目標）を分析して具体評価目標を作成し、その目標が各単位時間に分配されるが、それに合わせた自己評価表を作成する

(4) 評価方法の工夫

各教科毎に評価を考えるのではなく、学校全体で統一する

(5) 1 単元内における各単位時間の目標に対する達成状況の評価

・子どもの学習に生きるための形成的評価を行う

・子どもの自己評価と教師評価の一体化を図る

目標に準拠した評価を行うためには、指導目標を分析して、評価規準を作成し、単位時間の授業で使えるように具体的評価規準を作ることが大切である。指導計画だけが示されている学習指導案が見られるが、評価計画まで示されていないと指導と評価の一体化を図ることはできない。また、できれば具体的評価規準や評価基準（いわゆる判断の基準）は、複数の教員で作成することが望ましい。

以下に、年間指導計画・評価計画表の例を示す。

表1-3 年間指導計画・評価計画表

単元名	単元目標		単元の評価規準	具体的評価規準	評価基準									
	(関)	(思)			(技)	(知)	(関)	(思)	(技)	(知)				
月	めあて	主な学習活動	教師の支援・留意点	教材・資料	重点・単元的評価規準の分配	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
4						①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨



4 指導と評価の一体化における通信票の作り方

(1) 通信票の意味

結果を知らせる通信票から、次の学習に生かす通信票とする

(2) 今後の方向性

- ・通信票を目標と捉える
- ・どのように評価したのか説明責任の取れる資料を基にした通信票とする
- ・子ども、保護者、教師の三者が交流できる通信票とする

5 まとめ

(1) 学習指導（指導と評価の一体化）における校内研修において重要なことは、校長や教頭、研究主任の質の高いリーダーシップである。また、研究時間の確保、予算の措置、物的条件整備はいうに及ばない。特に、研究授業と学習指導案作成という課題に対して全職員がどのような認識をもっているかである。子どもの実態と教員の構成を考えて、煩雑な指導の仕方や評価の方法は避け、新鮮でアイデアにとんだ方法や形式を考えていくことを忘れてはならない。

(2) 具体的事実に基づく研究の流れの例

「具体的な課題を設定する」→「魅力ある文で資料を渡す」→「時間を見つけて読んでもらう」→「資料に厳しいコメントをつける」→「研修会で協議する」→「誰もが授業実践する」→「同じレベルで反省する」→「次に生かす」

講義の要旨は以上ですが、参加者の意欲付けが図られる素晴らしい講義でした。

平成15年度岩手県教育研究所連盟所員研修会の報告

1 期日・場所 平成15年12月12日(金)

研修Ⅱ (13:00~15:30)

岩手県立総合教育センター

研究協議

2 参加人数 25機関 112名

「指導と評価の一体化を図る学習指導を推進するための研修(行政・校内)の在り方」

3 内容
研修Ⅰ (10:10~12:00)

講義「目標に準拠した評価に基づく学習指導の工夫」
講師 鈴木節也氏

第1分科会 行政関係 25名
第2分科会 小学校関係 34名
中学校関係 12名

研究協議 「指導と評価の一体化を図る学習指導を推進するための研修の在り方について」

目標に準拠した評価に改訂され、各学校において評価規準を作成し、それに基づいて評価が行われていますが、指導に生かされていないのが現状ではないかと思えます。そこで研究協議では、指導と評価の一体化を図る学習指導を推進するために、どのような研修がより効果的であるのかについて参加者の話し合いのなかからその解決策のヒントを得るために、KJ法を使って研究協議を行いました。

第1分科会は、行政関係者を中心として「行政研修の在り方について」、第2分科会は、小・中学校別に研究実践者を中心として「校内研修の在り方について」協議しました。以下にその様子を紹介します。

第1分科会「行政研修の在り方について」

25名の参加があり、4グループ編成で協議を行いました。各グループとも、「指導と評価の一体化」

を図るための行政研修の進め方について、積極的に協議を深めていました。協議後、各グループでまとめた記録を全員に配布し、それを基に



4グループから発表をしてもらいました。「学校や地域についての正確な実態把握」「学校で実践したくなるような意欲をもたせる研修のコーディネートの方」「学校・行政・地域連携により三位一体で行う取組み」等の具体策が提案され、研修構想をも「意図的に運営を行うことの効果と重要性について、共通理解が図られました。

最後に、学校の実状と課題に対応するために、教育研究所や教育センターが連携しての年間研修・支援構想の立案の仕方について協議のまとめを行い、分科会を終えました。分科会テーマを視点に、「地域の教育施策・活動の活性化」を支える行政関係者が、主体的に自らの教育経営推進力を高める機会となりました。

第2分科会「校内研修の在り方について」(小学校)

小学校分科会は、34名の参加者を5グループに編成して協議を行いました。どのグループもポストイットが足りないくらい、研修の在り方について自分なりの考えを書いていました。

最後に5グループそれぞれから発表を行っていただきましたが、どのグループにも共通していることは、

共通理解を図るための理論研修を行うこと、それを受けて授業研究会を行うこと、そして、評価について見直しをすることの三つがセットと



なって校内研修を進めることが大切であるということでした。特に、理論研修では、目標に準拠した評価の趣旨を全職員で共通理解を図ったうえで、先進校等の情報を集めて、目標分析の仕方や評価を指導に生かす方法について知ること、授業実践では、評価したことがどのように指導に生かされているのか、またその指導が適切であったかどうかを協議を通して理解を深めること、評価の見直しでは、評価規準の見直し等のポイントについて知ることが指導と評価の一体化を図る研修において必要であると捉えられていました。

最後に各グループでまとめたものを全員に配布し、各学校に戻って来年度の校内研の構想のなかに位置付けていこうという意欲付けを図って分科会を終えました。

第2分科会「校内研修の在り方について」(中学校)

中学校分科会は、6名2グループ計12名により協議を行いました。各グループ毎に、熱心に協議が進められました。一つのグループでは、評価規準や判断基準も含めた評価そのものの意味を問う問題提起があり、評価を生かす学習指導となっているかという授業の在り方など、根本的なところで深く話し合いが行われました。また、一方のグループでは、「関心・意欲・態度」の評価について、実践に即して課題解決を図られるよう各学校の具体的な事例をもとに、目標に準拠した評価の考え方を協議し確認する場面が見られました。

最後の発表場面で、評価にかかわる研修や職員間での共通理解の必要性を確かめ、校内研の構想立案について、グループでまとめた資料などから具体的なイメージを捉えて分科会を終りました。



生涯学習の基礎としての就学前教育と保小連携

住田町教育研究所 川崎一弘

住田町は県東南部の中山間地域に位置し、人口約7,300人、町内には2つの保育園、3つの小学校があります。本町では幼保一元化を進め、平成14年度より「すみた幼児教育（保育）プラン」による就学前教育を行っています。

1 「すみた幼児教育（保育）プラン」の作成

保育所保育指針と幼稚園教育要領に基づき、教育研究所就学前教育部会（部員～小学校教諭各校1名、保育園保育士・教諭各園2名、社会教育指導員2名）で作成し、活用しています。

世田米、有住の両保育園の取り組み

両保育園では、保育所・幼稚園の区別なく、就学前の子ども達を健やかに育むために「生涯学習の基礎を培う就学前教育」と「保護者のニーズに応えた保育」の共存を図り、小学校生活への適応を図るために小学校との連携も積極的に行っています。また、子どもから大人までが地域で共存す



【ALTによる国際交流活動】



【森の保育園（高校生ボランティアと共に）】

るという生涯学習の視点に立ち、様々な場面で地域の方々との連携が図られています。

【園児と児童の交流と連携】

- 合同の活動～運動会等行事への相互参加、羊の毛刈り体験
- 系統的な体験活動～種山ヶ原での森林学習（森の保育園（春・夏・秋の3回）
*住田高校生のボランティア、森林体験（各小学校年1回）
- 国際交流（理解）活動～ALTの訪問（各保育園月1回、各小学校週1回）

【保育士・教諭の連携】

- 保育士の小学校授業参観・情報交換（4月）
- 小学校教諭の1日保育体験（長期休業）
- 就学前教育研修会（保育参観・授業参観）
- 入学時の適応支援（「園児保育の記録」を使った情報交換）

平成15年度岩手県教育研究発表会の案内

- 1 期 日 平成16年2月16日（月）～18日（火）
- 2 会 場 岩手県立総合教育センター
- 3 日 程 16日 講演会 分科会 17日 分科会
18日 研究授業 分科会
- 4 講演会
講師 市川伸一先生 東京大学大学院教授
演題 「豊かな学びと人間力」
内容 社会で主体的に生きる「人間力」の育成をキーワードとした内容です。
- 5 各教育研究所からの発表本数
盛岡2本 紫波2本 花巻1本 北上2本
水沢2本 千厩1本 大東1本 室根1本
遠野2本 宮古1本 山田1本 久慈2本

事務局から

「目標に準拠した評価」に改訂されて2年目を終えようとしています。県内のほとんどの学校では評価規準の作成を終え、それに基づいて評価を進めているわけですが、目標に準拠した評価の煩雑さだけに目を奪われ、その良さが実感できていないのが現状ではないかと思えます。そこで、現場の校長として目標に準拠した評価を全国に先駆けて推進した鈴木先生に、今回の講義をお願いしましたが、確信をもってこの評価の良さをお話しして頂き大変感銘を受けました。改めて、目標に準拠した評価が、指導に生かせること、授業改善につながることを学ぶことができました。岩手の子どもの学力向上のために頑張りたいものです。